

〈エピソード記述〉を用いた臨床概念の考察

—障害福祉サービス事業所Aにおけるフィールド調査をてがかりに—

○ 清泉女子大学大学院人文科学研究科地球市民学専攻 佐治 有希子 (009087)

キーワード：障害者福祉、臨床 (co-presence)、エピソード記述

1. 研究目的

本研究は、障害者福祉の現場における臨床 (co-presence) という行為の本質を明らかにすることを目的とし、〈エピソード記述〉を用いて具体的な一つの事例を考察する。従来、社会福祉領域において援助者に求められる臨床のあり方は、「寄り添い」というキーワードで説明され、援助者の能動性 (empathy) が前提とされてきた。しかし、現場の事象を関与観察者の間主観性において捉えるとき、目の前の現象に心を揺り動かされることで、躊躇い、葛藤し、戸惑う受動的な情動性が浮き上がってくる。そこで本報告では、臨床という行為の受動的な側面に着目し、他者に巻き込まれることによって役割性をおびた自己が解放されていくという逆説的な現象がいかんして起こるのかについて言及する。

2. 研究の視点および方法

本報告は、報告者が2015年11月に実施した障害福祉サービス事業所A (以下、施設A) におけるフィールド調査に基づく。報告者は、施設Aで2014年度から現在まで継続して調査を行っている。本報告では、関与観察を通して関わり合いを持った利用者Bさんとの間に起きた事象を「あるがまま」に描き出し、間主観的に把握したことを〈エピソード記述〉を用いて考察する。

〈エピソード記述〉は、発達心理学者の鯨岡 (2005) によって提唱され、これまで保育学を中心に質的研究法の一つとして用いられてきた。〈エピソード記述〉における記述者は、関与主体であり、観察主体でもある (=関与観察者)。〈エピソード記述〉は、従来の客観性を追求した実証主義的な行動観察研究とは異なり、観察者が実際に現場に赴いて、現場に関与しながら同時に観察するという、その場における共時性を重視する。そのため、現場において生起するさまざまな事象を、関与観察者の目と身体を通して間主観的に捉え、その実相を「あるがまま」に描き出すことが求められる質的研究手法である。

3. 倫理的配慮

本学会の「研究倫理指針」に基づき、施設名、当事者等が特定できないよう匿名化して記載する。また、本報告に際し、施設長および当事者に文書と口頭で事前に説明し、事例使用に関する承諾を得ている。

4. 研究結果

関与観察日：2015年11月1日

登場人物：利用者 B さん、関与観察者（＝報告者）＝〈私〉

【エピソードの一部抜粋：Bさんと10mの幅】※詳細は当日配布の資料に記載する

駅から施設 A へと向かうバスに乗っていると、〈私〉は一人で歩く B さんの姿を目撃した。このとき B さんは財布を紛失し、およそ 8km の道のりを歩いて帰ろうとしていた。B さんは財布を失くしたショックで動揺しているようだった。〈私〉はバスを降り、B さんに遭遇したことを施設 A に報告した。連絡を受けた職員は、B さんにそのまま歩いて帰るよう指示を出した。それを受け、〈私〉は B さんと共に歩いて帰ることに決めた。しかし〈私〉は土地勘がなく、B さんに向かって「道がわからないので、よろしくお願いします。頼りにしてます」と声をかけた。B さんは、横目で〈私〉を一瞥すると歩き出した。

初めは並んで歩いていたが、次第に B さんの歩みが速くなり追いつけなくなった。B さんは大股でしっかりと足取りで前に進んでいく。〈私〉は B さんに置いて行かれまいとして必死に歩を進めた。30分ほど黙々と歩いているうちに、B さんと〈私〉の間が 10m の幅に保たれていることに気づいた。B さんは時折、振り返らずに目の極だけで〈私〉が後ろをついてきているか確認し、〈私〉との距離が開き過ぎたときは、歩くスピードを落とし、間隔が広がり過ぎないように調整していた。そのことに気づいてからは、安心して B さんの後ろをついて歩くことができた。

【明らかになったこと】

B さんと〈私〉は、相互に巻き込み合いながら、10m という「間あい」を創出しながら絶妙なバランスを保っていた。この状況は、どちらか一方が「一緒に歩く」ことを諦めていたら成し得なかったであろう。

5. 考察

この事例は、「一緒に歩く」という行為を通して、その場に居合わせる（co-presence）ことを受動的な側面を明らかにしている。財布を失くして動揺する B さんの姿は、〈私〉をその場に惹きつけ、離れられなくした。まさに「他者の苦しみ」が、〈私〉をその場に引き込んだのである。〈私〉は B さんを励まそうと一緒に歩き出すが、次第に引き離されてしまう。このとき生じた 10m の幅は、動きの中で互いのあり方を模索し、バランスを取りながら互いをケアし合うような関係へと誘う「間あい」となった。以上の点から、臨床とは、互いを巻き込みあいながら、援助関係における役割性を越えて〈かけがえのない存在〉として傍らに居合わせる（co-presence）ことであると考察される。

【参考文献】

鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門：実践と質的研究のために』東京大学出版会。